

説教 『聖霊を迎える備え』山本 護 牧師
聖書 マラキ書 2：10～11／使徒言行録 1：22～26

日本のクリスチャンは、総じて真面目で清らか、であろう。だからクリスチャンに、不真面目で汚い一面を垣間見ると、「偽善者め」と非難したくなる。偽善者にされる者も、それを言いたてる者も、思い込みで刻んだ像に裏切られていく。現実の奥行きは強靱で、悪しき偶像も善き偶像をも打ち砕く。

クリスチャンという呼称は、小アジアあたりで起こった。「アンティオケアで、弟子たちが初めてキリスト者と呼ばれるようになった(使徒 11:26b)」。ただこれは、教会外からの呼び方であって、教会内部では「兄弟」と呼び合っていた(1:16)。要するに教会は、血肉ではない兄弟(姉妹)の群なのだ。

「我々は皆、唯一の父を持っているではないか。我々を創造されたのは唯一の神ではないか(マラキ 2:10a)。預言の御言葉を継ぐキリスト者は、唯一の父なる神を持った兄弟(姉妹)である。かといって、美しい関係だとは限らない。「なぜ、兄弟が互いに裏切り、我々の先祖の契約を汚すのか(2:10b)」。裏切りがあっても、キリストに結びついた兄弟(姉妹)は、社会層や家族を乗り越えて教会を形成する。

イスカリオテのユダが死に(使徒 1:18)、十二使徒に欠員が生じたため、兄弟の中から新使徒を一人選ぶことになった。「主イエスがわたしたちと共に生活されていた間、つまり、ヨハネの洗礼のときから始まって、わたしたちを離れて天に上げられた日まで、いつも一緒にいた者の中からだれか一人が、わたしたちに加わって、主の復活の証人になるべき(1:22)」。条件は二つ。最初期からイエスに従っていたこと、そして復活の証人であること。幾人かの姉妹もこれらを満たしているが、当時の状況から女性は除外されている。ただこの二つの条件は、特権でもないし、誇り得るようなことでもない。

条件に合った者が二名選ばれた。一人はバルサバ(安息日と言う仇名)と呼ばれるユスト(ギリシア名)=ヨセフ(ヘブライ名)、もう一人はマティアだ(1:23)。彼らは十二使徒と同じく、地上のイエスを師と仰ぎ、人間として生きた神の子の姿を知っている。ちなみに、後に重要な働きをする使徒パウロは二つの条件を満たしていない。「主イエスと～いつも一緒にいた(1:22)」者はすなわち、イエスと共に歩んだことで惨めな姿が露わにされた者でもある。ユダは己の惨めさから自死し、他の使徒はこれに耐えた。

使徒候補はペトロと共にひどく叱責された者であり(マルコ 8:33)、十字架の時には逃げ出した者であった(14:50)。すなわち十二使徒は、すぐれた働きや信仰によって選ばれるわけではない。むしろ逆ではないのか。イエスに従うがゆえに幾度も挫折し、かつそれを隠したり美化しないことが使徒たる所以なのだ。誤り多き弟子の中から新しい使徒が選ばれる。この時、使徒はまだ聖霊に満たされていないが(使徒 2:4)、来るべき神の国が早くも、復活の証人となる彼らの内に滲み出ていたのかもしれない。

「すべての人の心をご存じである主よ、この二人のうちのどちらをお選びになったかを、お示してください(1:24)」と祈ってくじを引き、マティアが使徒に加えられた(1:26)。イエスは死に、復活したイエスも天に昇ってしまったが(1:9)、主なる神は働いておられる。深く祈り、弱く乏しいままの己を献げる時と場に、このように神の霊が生きて働かれる。それが明確になるのは来週、聖霊降臨において。



【おまけのひとこと】

祈りにおいて 御心と 御手と 私たちの決断は混然となる 城はどこから見ても城に違いないが ひと巡りすると 大きさや奥行が分かってくる 混然とした祈りも 巡っていて分かることがある